●目次　子どもの道徳 第97号

●マイハート
◇「漫画家になる方法」　やなせたかし……　**3**
●教育のひろば
◇信頼し，信頼される　佐藤義則……　**4**
●連載／教育一語
◇③「本立ちて道生ず」／④「啐啄同時」
⑤「憤せずんば啓せず，悱せずんば発せず」／⑥「外を制するは内を養うなり」　新宮弘識……　**8**
●連載
◇川柳を道徳に活かす②　松田憲子……　**12**
●連載
◇人間関係づくりの演習を活かす②　土田雄一……　**13**
連載／道徳まんが道
◇「正直に言おう」「無駄な努力」　加藤宣行……　**14**

本文中の勤務校は平成22年 5 月19日現在のものです。

●著者プロフィール●

新宮弘識先生▶二つの大学で人間教育に関する授業を担当している。一つの大学は，20才前後の学生で，他の大学は社会人学生である。社会人学生は問題意識が高く，深い授業ができて楽しい。問題意識の重要性を実感するこの頃である。

土田雄一先生▶軒先の燕の巣から雛が四羽巣立ちました。若い教員も早く一人前になって巣立ってほしいと願うこの頃です。「若手教員の育成」は大きな課題ですが，自立のサポートには何が必要か考えています。千葉大学教育学部特命教授を拝命しました。

松田憲子先生▶自分でも川柳を作り始めました。でも思いついてもすぐ忘れてしまうのが課題。そんな私でしたが，携帯電話で原稿を書いている話を聞き，「これだ！」今では，思いついたら携帯を取り出しています。

加藤宣行先生▶
筑波大学付属小学校教諭・淑徳大学講師
日本道徳基礎教育学会事務局長
使えるベーシック研究会常任理事
光文書院『ゆたかな心』編集委員

■小社 HP（「ご意見・おたより」コーナー）などを通しまして『子どもの道徳』へのご意見・ご感想をお寄せください。

マイハート

「漫画家になる方法」

絵本作家・詩人・作詞家　やなせたかし

※本コーナーは，『子どもの道徳』91号で掲載された内容を再編集したものです。

ぼくの子ども時代は現在とちがってのんびりしていましたね。ほとんどの子どもたちは塾なんかへ行かないで，学校が終わると日の暮れるまで外で遊んでいました。

「子どもは風の子だ，外で遊びなさい」というのが原則で，家の中で勉強したり，本を読んだりしていると叱られました。

故郷が高知県の山峡の草深い田舎だったから余計そうだったかもしれません。

現在なら，子どもがそんなところへ行ってはいけません，と禁止されるような渓谷の急流で泳いだり，魚をとったり，木によじのぼって枝にぶらさがって落っこちたり，ほとんどターザンの子どもか，類人猿のやや進歩した幼児みたいな暮らしで，絶えず全身生傷だらけ。ひざっこぞうはいつもけがですりむけていて，親に見せてもツバをつけて「チチンプイプイ痛いの痛いのとんでけ！はい，治った」でなぜだかあまり痛くなくなったのです。

学校ではイジメに近いこともありましたが子どもたちのルールがあり，ガキ大将が解決しておしまい。

ぼくの考えですが，子ども時代は基礎体力をつける大事な時代だと思います。健康第一，紫外線を浴びて緑の山野を走りまわって足・腰・心・肺・その他がきたえられて丈夫になる。

昔の言葉ですが「よく遊びよく学べ」ですね。まぁぼくはあまりよく学ばなかったので今になってみるとその点は後悔しています。88才になった現在でも第一線で激烈な競争社会であるメディアの世界でアンパンマンその他の仕事を続けていられるのは，子ども時代の基礎体力がしっかりしているからだと自分では思います。まちがいですかね。

アンパンマンという絵本やアニメーションの仕事をしているせいで子どもたちからよく質問されます。

「漫画家や絵本作家になるにはどうすればいいのですか」

方法はありませんね。とにかくこれはこの仕事が心の底から大好きでないとできません。たとえばサッカーの選手になるとしても，サッカーが大好きでないと激しい練習に耐えられない。どんなにつらくても大好きだとそれがよろこびに変わるから不思議。

それから本当に漫画が大好きでどうしても漫画家になりたいと思うなら，漫画の本を読むのは半分ぐらいにして，漫画以外のもの，音楽でも絵画でもスポーツでも科学でもなんでもいいから熱心に勉強して身につけることが大切なんですね。

百年に一度の大天才漫画家の手塚治虫氏は医学博士でした。だから『鉄腕アトム』や『ブラックジャック』がかけたんですね。

『ベルサイユのバラ』で有名な池田理代子さんは音楽に熱中する勉強大好きの優等生でした。

優等生といえば里中満智子さんもそうですね。なにしろ99点だとお母さんに叱られて，全科目100点というからものすごい。

ではおまえはどうかと言われると「すみません」とあやまるしかないのですが，グラフィックデザインを専攻したことと『詩とメルヘン』という月刊誌の編集長を30年間やったことが他の漫画家と少しちがうところかもしれません。

1919年２月６日高知県生まれ。東京高等工芸学校図案科（現千葉大学工学部）卒業。73年「キンダーおはなし絵本」にて「アンパンマン」が人気シリーズとなり88年からテレビアニメ化。主な作品に『やさしいライオン』『アンパンマンぼうけんシリーズ』（フレーベル館）『Mr. BO』（サンリオ）全詩集『手のひらを太陽に』（北溟社）などがある。「手のひらを太陽に」やアンパンマン全曲を作詞。勲四等瑞宝章を受章するほか受賞歴多数。日本漫画家協会理事長，「アンパンマンミュージアム」名誉館長など。07年４月「横浜アンパンマンこどもミュージアム」オープン。
http://www.anpanmanshop.co.jp/

Archive／アーカイブ

―信頼し，信頼される―

東北楽天ゴールデンイーグルス投手コーチ　佐藤　義則

※本コーナーは，『子どもの道徳』93号で掲載された内容を再編集したものです。

人生の先輩が作ってくれた野球への道

私は中学校まで奥尻島にいたんだけど，普通に家の手伝いしながら学校行って，普通に友達と遊んで……。都会じゃない田舎だし，今みたいな時代でもないし。勉強はあまりしなかったけどね。そのころは，私のところだけじゃなくて皆の家が漁師であったり，自分の家で食べるものは全部，自分で作ったりしていたんでね。それを家族で手伝いながら中学校までやってきたかなって感じ。だからもう，小学校はここで，中学校はここに行くってことに決まってるからね。都会みたいにいい学校を選んでこの学校に行くってわけじゃないから。

今の子どもは夢がもちにくいっていわれているけど，じゃあ私らのころはというと，奥尻島にいて特に夢なんかもたないよね。周りしかないもん。友達と好きな野球やったりしていたけど，ウチは漁師だったから，将来は兄貴と二人で親父の船に乗って手伝いをするかなあ，っていうぐらいの考えでしかなかったね。今みたいにあれもありこれもあり，テレビもあり，何でもすぐ目に入るっていう，そんな時代じゃない。今みたいに何でもある時代じゃないから，今だったら，例えばプロ野球に行きたい，っていうことなら親が一生懸命教えてくれたり，野球チームに通わせてくれたりするんだろうけど，そういう時代じゃない。普通に学校に行って勉強して，日曜日は友達と野球やったりサッカーやったり，そういう生活だったよね。だから，あれになりたい，これをやりたい，だからそこに行こう，ということは全然なかったね。夢をもつとかもたないとか考えなかったよね。

だから，そのころはプロ野球選手になれるなんてまったく思ってなかったし，あこがれていた選手とか目標にしていた選手とか，そんなのいなかった。あのころは皆そうだったんじゃないかな。親父が一生懸命働いて，それを家族で手伝いながら生活していたわけだから，プロになってあそこへ行こうと思っていたとか，そんなの全然ないよね。高校になってテレビで野球を見るようになって，王さんとか長嶋さんとかすごいスーパースターを見たけど，それでもプロに行こうとか思わなかったからね。何でもそうだけど，やっぱり自分の力の中で考えることなんだけれども，北海道でやっている分にはあの選手までになったらプロに行けるんだなっていう対象になる相手がないから，目標がないよね。自分のレベルがどんなんかもわからないし……。

そういう中で，野球をやっていて，中学校のとき大会で勝って，その次の大会でも勝って，函館まで行った。そこで有斗高校の監督と部長がテストに来てくれてね。そういうだれかが現れてきてくれたから，次の段階に行けたっていう感じ。自分がそこに行こうと思ってやってきたんじゃなくて，それをやってたら目をつけてくれたっていうことだよね。それで高校に行って野球を一生懸命やって，甲子園目指して3年間やって，まあ結局だめだったけども，まあまあ頑張れた。それで就職しようと思ったときに，長谷川さんというおじいちゃんが有斗高校に来てくれて，日大のテスト受けてくれないかっていうことになってね。銀行に就職決まってたんだけども一応テストだけっていうことで。やっぱり自分と同じ甲子園目指してた同級生がどれくらいの野球やるのかなっていう興味もあったからね。セレクションていう野球のテストがあって100人近く来るから，それを見たくて東京まで行ったんだけど。

その長谷川さんっていう人が有斗高校に来てく

れなかったら拓殖銀行に入ってたからね。もう自分では行くって決めてたから。何かの節目のときにそういう人が現れてくれる。そういう感じで，そこに行くから頑張ったんじゃなくて，今やることを頑張ってたら，自分の考えてないほうに人が現れてくれて，それで行ったって感じ。だから大学にも行ったけど，そのときもまだプロに行くとかじゃなく，「4年間大学に行っても拓殖銀行には戻れるだろう」っていうふうに口説かれてね。それで学校へ帰って担任と監督に相談したら，「東京に行って野球やりたいんだったら行ってもいいよ。拓殖銀行は断ってやる」って言われて。それなら東京で，大学でやってみたいなあと思ってね。やっぱり北海道は11月から3月，4月くらいまで野球できないからね。1年間外で野球できるところでやってみたいと。ほんとうは早く働いて金稼ぎたかったんだけど，どうもそれが後々になっちゃって，とにかくいちばん嫌いな勉強のほうへ行かされてしまったって感じだよ(笑)。

でも自分の人生の中でだれかが現れてくれるっていうことはすごく大事なことだと思うよね。

“今日一日を一生懸命に”の積み重ね

現役のときに大きな病気をして入院したことについて皆によく聞かれるけど，その場ではあんまり自分で深く考えてないからねぇ。そりゃまあ病気したのはもうたいへんなことであったけどね，1年間プレーがないわけだから。でも若かったし治ればまだ野球できると思ってたからね。1年間，入院して通院して病気を治すことだけで，野球のことはほとんど考えられなかったしね。ほとんど寝たっきりだったから，嫁さんに運転してもらって，2時間ぐらいかかる病院にずっと通って。そのおかげでその先生のところでまあまあよくなって。それでコーチが手術するんだったらここでやろうかっていうところを紹介してくれた。そこでトレーニングの先生のところで動いてみたら，あっ，全然大丈夫だって。椎間板分離症っていう病気で，周りの筋肉でカバーすれば，野球はできる。その先生もつきっきりで教えてくれてやってくれた。1か月ぐらいでもうよくなったからね。

途中であきらめようと思ったことはないね。ちょうど自分がフォームを修正するのに毎日，梶本*さんって人に12月31日までつきっきりで教って，ようやく完璧になって，15以上は絶対勝てるくらいよくなったからね。そのときにそういう病気になったんだけど……。周りはもう駄目だろうと思ってたんだろうけど。1年間外に行かず，だれにも会ってないからね。後で皆にはよく治ったねって言われたけど，治ればまた野球できるってのはあったから。だからあきらめることはできなかったね。

皆に長くやるのはどうするんですか，ってよく質問されるけど，そんなの考えてやってないもんね。今日一日を一生懸命やってるだけで，その結果がそうなっていっただけで。まあ野球の場合は15勝とうとか20勝とうとかは目標立てるけど，それ以外はこうなろうとか，あそこまで行こうとか思ってやったことないね。じゃあ20年やろうかなって思ってだれもやってないからね。何でも積み重ねだから，その積み重ねの中で，じゃあこれ練習しようとかあれをやろうとかやっているだけで，その中でいい練習ができたら長くできるし。まあ故障も少なかったしね。大きいのはあの病気だけだからね。

延長12回216球完投のときもそうだよね。そのときは球数とか気にならなかったから。それが投げ終わったら200球投げてたってやつ(笑)。まあ，さすがに疲れたけどね。200球以上投げた試合が，ほかに3試合あったんだけど，全部私から代った投手が打たれちゃった。だから，さすがにそのときは監督が代えてくれなかったね。12回に味方の点数がゼロだったら，投げるのやーめたって言おうと思ってたけど（笑)。

子ども(選手)は指導者しだい

まあ，でも代えられたときは抑えて欲しいなあとは思っているけど，そのまま勝ったらありがとうで，逆転負けしたらしょうがないなあってあきらめるしかないよね。マウンド降りる自分が悪いと思ってるからね。

だから95年の優勝を決めるグリーンスタジアム神戸の試合でも平井*が打たれて逆転されたんだけど，あいつが打たれたからってどうのこうの何にも思わないよね。あのシーズンは，あいつが抑えをやってくれて優勝できたわけだから。全然気にすることはないよね。皆でやってることだから。一人でやってるわけじゃないんだから。

子どもたちの野球の試合でも，先発ピッチャー

*梶本隆夫：元プロ野球選手。当時は阪急の投手コーチ。

*平井正史：現中日ドラゴンズ投手

の子どもが，代わった後に投げて打たれた子どもを責めたりしちゃいけないよね。そういうふうに責める子どもがいるってことは監督が悪いっていうことだよね。やっぱり教育してる人がそういうふうに教えていかないといけない。子どもじゃ考えられないから。プロでコーチやってても，野手がエラーしても絶対顔に出すなとか教えるからね。そういうのはもう子どもじゃなくて，監督とかそういう人が，教えていかないといけないね。例えばあいさつのできないチームだったら，監督が何も教えていないってことだからね。子どもらはそれでいいんだと思ってるから。

自分で工夫することが大事

それから自分で考えていろいろ工夫しようとすることが大事だと思うよね。例えば“ヨシボール*”なんだけど，これはもう，自分が試合で投げている中で，あのバッターを打ち取りたいって気持ちからでき上がったボール。それを投げようじゃなくて，自分がカーブ投げてて，カーブでストライク取って，そのカーブみたいな感じでバッターを空振りさせたいっていうのが常にあって，それが腕を強く振ることによってボールが小さく変化しだして，それをまた，ひねり方と放すときにちょっと工夫して覚えたボールだよね。緩いカーブ投げて早いカーブ投げて，それがどんどん進化していって，フォークボールみたいになった。

今のピッチャーは自分の投げたい握りでシュートならシュート投げて，って感じだからそれでいいと思うんだよね。カーブっていうのはこうして絶対握りなさいっていうのはないからね。まあストレートの場合はあるけど。あとは変化がどうするかって自分でわかれば，どういうふうに握ってもいいと思う。皆，手の長さも指の長さも違うし，足の長い子，短い子，腕の長いピッチャーもいれば短いピッチャーもいるわけだから，それぞれの教え方が違うからね。そういうのを見極めないと教えられない。

コーチは選手の特長を知って信頼される

やっぱり選手には認めてもらわないといけない。そこがコーチとしていちばん大事なことだよね。信頼されるってことがね。コーチの場合は，教えてることに納得してもらわないといけないけど，それには，例えばピッチャーの場合，いいときと悪いときのフォームをちゃんと見てやることが大事だね。特にいいときのフォームは絶対覚えておかないといけない。いいときはこうで，今はこうなってるよっていうふうに説明しないといけないから。いい時のフォームがわかっていないと試合中に修正できない。試合中に修正できれば，それだけ早く立ち直れる。だからマウンドに行ったときは，「何でシュート回転していると思う？」「こんな投げ方になっているからだぞ。」とフォームのことしか言わないよ。それ以外で行くのは交代のときだけ。悪いとこを直すんじゃなくて，いいときのことを覚えておいて，そこに戻す。いいとこを伸ばしながら悪いとこをちょっとずつ直していく。悪いのを直すのは一から十までやらないといけないし，時間かかるんだね。だから150キロ出るんだったら，150キロ出しながらコントロールをつけていく。そういう練習をする。せっかく150キロ投げられるのに，コントロールはよくなったけど145キロしか出なくなったら何にも意味ないからね。それだと特長，長所が伸びていないってことだから。そう指導をしていれば信頼というものは自然と生まれてくるんだね。

それからピッチャーでも怒っていいやつと怒っちゃダメなやつといるわけ。弱いやつは怒っちゃうとキャッチャーまでボール届かなくなる（笑）。ビビッちゃってさ。怒られて頑張るやつと，ショボーンとしちゃうやつといるんだから，プロでも。だから同じように失敗したら怒られて頑張るほうを怒る。怒るっていうか注意するよね。そうすると，あっ，こういうことすると怒られるんだなってショボーンとしちゃうやつもわかるわけだね。そういうのを見分けないといけない。怒られないようになったらダメだっていう言葉もあるけどそれみたいなもんよ。期待してるから怒るんであって，よくなって欲しいから怒るんであってね。で，結果出したらほめてやればいいしね。そういう性格も見てやんないといけない。そういうのが教育だと思うけどな。

先生たちも子どものことをしっかりと見ておくということが，「１＋１＝２」って教えるよりも大事じゃないかと思うんだよね。この子はこういう性格してるっていうのを把握できれば，「あっ，こいつはちょっと今回テスト悪かったから悩んで

＊佐藤氏オリジナルの変化球

るな」とかね。そこで少しアドバイスしたりすれば，また頑張れるんじゃないかなと思うんだよ。

それに全部平等じゃないといけないと思うよ。勉強できる子できない子っているけど，まあ選手でもそうだけど，いいやつは教えなくてもいいわけよ，勝手に良くなるんだから(笑)。下のほうをウロウロしてるやつを一生懸命してやんないと。私がダルビッシュを育てたって皆言ってくれるけど，だれが教えたって良くなるよ(笑)。だから中継ぎなんかでも，勝ちゲームで投げさせたことによって自信つくよね，それで抑えられれば。いつも負けゲームばっかりだったらやっぱりね。今日は負け試合だから打たれてもいいやって思われるのがいちばん困るわけ。だからちょっと点数の余裕のあるときは，いつも負けゲームで投げるピッチャーを使ってやる。それで今度は一点差で勝ってる試合でも投げられるようになればね。勝ってるゲームでも投げられるようにしてやるのが私らの仕事だから。

子どもは好きなことには努力する

まあ勉強は確かにちゃんとやらなきゃいけないけど，やっぱり一生懸命，習ったことを繰り返しやったやつが，早く勉強できるようになるんじゃないかな。野球でも，「あれ，いつの間にこんなにうまくなったんだろう」っていうやつは努力してるやつだよ。プロに入ってきても野球を好きなやつと嫌いなやつといる。それ言ったら皆，えー，とか言うけど，それは確かにプロに入りたくて入ってきてるんだけど，入ってしまったらそこで終わっちゃうやつもいるから。練習とか見てたらわかるもん。ああ，こいつはあんまり好きじゃねえなぁって。努力しないもん。好きなやつは全体の練習終わってもバッターが特打ちやってたら，球拾いしながら走ったり，球拾い手伝ってる。あんまり好きじゃないやつは帰っちゃう。そういうとこ見てたらわかるよ。下手でもいいと思うんだよな。好きになんないといけない。好きになれば練習するし努力するから，下手でも上手くなるよね。

それで，好きにするためにはやっぱり子どもらが，まあ私らの場合は選手だけどもね，いつでも入って来られるような，相談する場をいつも開けといてやらないといけないよね。ただ「おい，1＋1＝2だぞ」って言って，授業終わりましたって教室からいなくなってたら，だれも相談来ないよね。こっちから言ってかないと，待っててもやっぱり質問することがわからない場合もあると思うんだよね。そいつらがいつでも聞けるものを開けといてやらんといけない。生徒がホントに安心して相談に行けるには，いつも受け入れる態勢をしてくれてないといかんよね。そうすればまた，信頼関係というものも生まれてくるしね。

教師も子どももいっしょの場を

私らのころは，中学校の野球部って，田舎で試合する相手も少ないから学校にいる男の先生らと野球の試合をしてた。授業終わってからね。全然試合しないとうまくなんないからって。監督が先生だから，監督が今日試合しようよって言ったら，教員が全部手伝ってくれたの。田舎だからできたのかどうか知らないけど。例えばボール捕れない先生もいたけども，人数いればいいからね。そういうふうにいっしょにやってきた。学校もそんなに大きくないからできたのかもしれないけど，でももっと大きい学校だったらもっと先生がいるわけだからね。今は中学校の野球部っていうのがなくなりつつあるからね。少年野球的なそっちに行っちゃうから。そういうところから先生と生徒っていうのが離れていってるのかなって思うよね。

だから勉強の教室の中だけいっしょじゃなくて，そういうとこでいっしょに子どもらと遊ぶ時間があれば，もっと楽しいんじゃないかなと。皆で助け合ってやらないといけないからね。私らはホントに小っちゃい島だったから「今日，野球やろうよ，試合やろうよ」って言ったら皆「いいよ」って手伝ってくれる。そういう教育だったね。

小学校のときは，私らの場合は田舎だから遊ぶ仲間がいつもいっしょだった。今日は日曜日だから皆でやろうか，土曜日だったら午前中で終わるから昼から野球やろうかって，いつも同じことして遊んでた。勉強以外でもいつもいっしょだから仲よしになっていく。ただ学校でだけ，野球のチームに入ってるときだけいっしょってなると，なかなかそういう仲間はできないよね。今はそういう場所がなさ過ぎるっていう感じがするね。(談)

阪急，オリックスにて活躍。最多勝・最優秀防御率などのタイトルを獲得。40歳11か月で史上最年長ノーヒットノーラン(当時)達成。現役引退後は日本ハムなどでコーチを歴任しダルビッシュ投手らを育成。通算成績165勝137敗48セーブ，防御率3.97，1755奪三振。

取材日：2008年7月14日

本立ちて道生ず

―ねらい・資料の読み等の授業の「もと」について考え悩むことの重要性

淑徳大学名誉教授

『論語』の学而第一の二章にみえる言葉である。本文は,「君子,本を務む。本立ちて道生ず」である。ここでいう君子とは何か。「君子とは,完成された聖人と異なり,自分の不完全性を自覚してよく生きたいと求めている者をいう」(『儒家の道徳論』千徳廣史・ぺりかん社)。従って,子ども教師も君子であるといえるし,お互いに君子でありたいものである。

その君子は,何を求め続けるかといえば,「もと」を求め続けるというわけである。何故ならば,「もと」をしっかりと確立していれば,道は自然に生まれるからである。

道徳教育における「もと」や「道」とは何か。

私は,先ず,「この授業を通してどんな子どもを育てるか」について考え悩むことが重要であると考えている。「この授業を通してどんな子どもを育てるか」という「もと」が確立されていれば,「この授業をどう展開するか」という「道」は自然に生まれると考えているからである。

「この授業を通してどんな子どもを育てるか」に当たるものは,主題のねらいである。

主題のねらいは,まず,そのねらいがどのような人間の形成に連動しているかという大局的な目的観が大切である。つぎに,この授業を通してどのような道徳的心情を育てるか,どのような道徳的理解を深めるか,どのような道徳的実践を期待するかと,ねらいを具体的に把握することが大切である。これらは,ねらいを人間のよさから考え,それを自分の言葉で具体的に書く作業でもある。

資料の読みも授業の「もと」の一つである。資料の読みは,内容項目から読むことが一般的であるが,教師という立場を離れて,「一人の人間としてこの資料から何を学ぶか」というように,人間のよさを求める者の一人として,総合的・構造的に読むことが大切であろう。

第三の「もと」は,子どもの実態把握である。これは,子どもの問題点をとらえることが一般的であるが,これでは,子どもを病人扱いにしかねない。子どもの可能性に着目して,それを伸ばし育てる教育でありたい。

このようにして「もと」が明らかになると,指導過程・資料・発問・反応の受け止め方・板書等々の方法は,自然に生まれるものである。

これらの方法は,目標や内容・資料・子どもや学級の雰囲気等々の諸々の条件,つまり授業の「もと」によって異なる。従って「もと」をしっかり確立していなければ,授業を成立させる条件に即応した教育の方法を生みだすことはできないということになる。

私が筑波大学附属小学校に勤務していたとき,多くの先輩は,「道徳教育における問題解決学習は,目的か方法か」「徳目とは何か。それと君の生活とはどのように関係しているか」「今日の君の授業は,どのような人間教育に結びついているか」と問い質してくれた。これらの先輩達は,「本を務む」を実践した人々であり,だからこそ尊敬できたし,苦言が謙虚に受け止められたのである。

このような立場から道徳教育の現状を見ると,「どう展開するか」という方法を追い求め過ぎているように思われる。道徳教育,特に道徳の授業に関して,多くの禁止事項があるやに聞くが,そのほとんどは方法論である。これでは,「本立たずして,道に迷う」である。

「もと」を求める際,もう一つ大切なことがある。それは学校教育は公教育であるから,教師の独善は許されないことである。そこで学習指導要領の精神をよく理解し,それを踏まえて,「本を務む」について悩み苦しまなければならないのである。「教師よ。哲学せよ」である。

啐啄同時

―子どもの求める心と教師の指導力との調和

新宮 弘識

中国の禅書『碧巌録』にみえる言葉である。「啐啄同機」「啐啄之機」ともいう。

雛が孵るとき，雛は卵の中から親鳥に生まれますというサインを送るという。これを「啐」という。親鳥はこのサインを瞬時に感知して，外側から卵を砕くという。これが「啄」である。

「啐」と「啄」が同時であるとき生命の誕生がある。親鳥が雛の「啐」を待ちきれずに殻を砕けば早産になる。雛の「啐」を感知できずに殻を砕くことが遅れると死産になる。「啐啄同時」は，雛の内なる声とそれを感知した親鳥の外なる力とがうまく調和することの大切さを物語っている。

雛と親鳥との関係は，子どもと教師との関係と同じである。雛の「啐」は，子どもの内なる声であり，親鳥の「啄」は，教師の外からの働きかけであるといえよう。子どもの内なる声と教師の外からの働きかけという相互の力が，内外相応じてこそ教育は成立するといってよい。

『碧巌録』に，「対一説」という言葉もみえる。

ある僧が雲門（864～949・唐の禅僧）に「釈尊（釈迦）が，生涯を通していった教えは何ですか」と質問した。この質問に対する雲門の返事が対一説である。釈尊は教えを乞う者の知恵の深浅に合わせて法を説いたと返事したのである。これは，相手の状況をよく見定めて対応することの大切さを説いているのである。

「啐啄同時」や「対一説」は，教育においてもいえる。教育を考える際の子どもの実態調査や観察等は，「啐」であり，その「啐」を生かした教育目的や教育計画は「啄」であるといえよう。また，授業を行う時の，子どもの実態調査や観察は「啐」であり，目標を立てたり展開を構想したりすることは「啄」であろう。さらに，授業中の子どもの反応は「啐」といえようし，その反応をどのように受け止めてねらいに向かってどう集約していくかは「啄」といえよう。

ところで，子どもの実態調査や観察は，子どもの内なる声つまり「啐」を聞くことに他ならないが，これが難しい。道徳授業の指導案を立てるとき，子どもの問題点よりも，子どもがよく生きたいとする積極的な声を聞くことが大切であろう。子どもの問題点から出発した授業は，その問題点をどのように改めさせるかというというように，子どもを病人扱いにした暗い授業になりやすい。どんな子どもでも自分を高めたい学びたいとする心を持っていると信じ，そのような声を聞くことから出発した授業は，明るく積極的な授業になる。

このように「啐」のとらえ方によって「啄」も変わるのである。

発問に対する子どもの反応をどう理解するかも，「啐」を聞くことに他ならないが，これも重要であり且つ難しい。子どもの反応は多様である。発言はしないが，肯いたり，目を輝かせたりしている子がいる。問の意味が的確につかめないで迷っている子どももいる。子どもの発言の中にも，舌足らずな発言もあるし，ねらいからはずれた反応もある。教師には，これらの多様な反応つまり「啐」を，瞬時にどのように理解するかという力が求められる。

さらに，このような「啐」を，瞬時に理解するだけではなく，それをねらいに向かってどのように生かして授業を創っていくかという「啄」も重要である。

啐啄同時は，教育の哲理をいっているが，それを生かすのは，教師の人間力や教育力つまり「本立ちて道生ず。君子本を務む」以外にない。

憤（ふん）せずんば啓せず，悱（ひ）せずんば発せず

―子どもの問を盛んにする

これは，『論語』の述而第七にみえる言葉であり，啓発の語源でもある。

憤は，学習者が何かをわかろうとしてよくわからず，それを何とかわかりたいとする心が高まって，その心が顔色に表われることをいう。悱は，学習者が何かをいいたくてうまくいえず，口をもぐもぐさせることをいう。学習者が憤し，悱する時を待って，啓（ひら）いてやり，導いてやるという意味である。教育一語④の啐啄同時を，さらに進めた教育方法であるといえよう。

ところで現代の子どもたちは，憤や悱が希薄であるように思われる。従って，子どもの憤や悱を待つのではなく，教師の手によってそれを盛んにしてやることが肝要ではないだろうか。このように考えると現代は，「憤を盛んにして啓し，悱を盛んにして発す」といったほうがよいように思う。

では，憤や悱を盛んにするには，どうしたらよいであろうか。このことを道徳の授業の導入に絞って考えてみよう。

私は，導入において，興味から関心へ，関心から問題意識へというように，子どもの内なる声を盛んにする教育の工夫が大切ではないかと思う。

興味は，学習内容がおもしろそうだと思うことをいう。野次馬も同様である。関心は，学習内容が自分と関係があるかないかに関係なく，無視するわけにはいかないとして，それをよく知ろうと思うことをいうが，まだ傍観者の域から脱していない。興味も関心も，まだ野次馬と同程度である。問題意識は，その重要性を感じて，それを解決しようとする知的姿勢をいう。従って導入では，単なる興味関心ではなく，もっと子どもの問題意識を大切にしたいものである。

問題意識は，子どもが内面に「わからない」「知りたい」「どうしたらよいだろう」「人々はどう生きたのだろう」等の憤や悱を抱いているか否かが重要になろうが，子どもは，このような道徳的問題を意識して生活していることはほとんどないといってよい。そこで，問題意識を盛んにする必要があるが，その方法は大別してつぎの三つの方法が考えられよう。

①，問題群の中から，自分（自分たち）の問を選択させる方法

教師がいくつかの問を示してやり，その中から子どもに自分（自分たち）が考えたいと思う問を選択させる方法である。

②，日常生活の中から，子どもに問を意識させる方法

日常生活における子どもの悩み，心の揺れ，葛藤等を問としてまとめていく方法である。

子どもの生活の負の部分を問とする場合，それが個別的なことであったり，行為だけの問題であれば，道徳の授業の問とはならないことがあるので注意を要する。

③，資料の中から，問を把握させる方法

最初から資料を提示して読ませたり，話し合いをさせたり，教師から問いかけたりすることによって，子どもの中にある問が確かなものとして確立されていく方法である。資料を読んでいく過程で，子どもの反応を生かして，子どもの学びの心に点火し，問として構成していくわけであるから教師の人間力が強く求められる。

人間は，わからないとわかりたいと思い，できないとできるようになりたいと思う心を持っている。それは，自分を高みに向かって輝かせたいよく生きたいとする心に発している。この求める心が学習の出発点であり，それを大切にした教育こそ本ものの教育といえよう。

外を制するは内を養うなり

―心と行とを一如のものとしてみた道徳教育

我が国の昭和40年代から60年代の道徳教育は「道徳教育は心の教育である」「道徳の時間と特別活動の時間の教育は，その本質において異なる」「心の教育と行の教育とのセット化は，望ましくない」とする道徳教育論に立った教育が強調された時代であった。

この道徳教育論は，「人間らしく生きるには，わが内なる心に問い，自らの力で行為を選択してこそ，その結果としての善を誇り悪を羞じることができる」という意味において妥当である。また，昭和期は，一部の教育界に道徳の時間に対する批判があって，道徳の時間を確立するためにという行政的な意味もあったと思われる。

平成期に入ると，人間が本来持っている人間のよさは，生活上よいと言われていることを，生活の中で学ぶことによって磨かれるとする教育論（経験主義，生活主義であり，学校における教育活動全体で道徳教育を行おうとする教育論）と，人間が本来持っている人間のよさは，人間のよさを教えることによって磨かれるとする教育論（教科主義，系統主義であり，道徳の時間を特設して道徳教育を行おうとする教育論）とが調和したところに道徳教育があるとする教育が本格化されたように思われる。教育行政論ではなく，純粋な教育論に立った道徳教育論を展開である。

ところでここに示した「外を制するは，内を養うなり」は，『論語集註』（簡野道明補註・明治書院）にみえる程子の言葉である。これは「人間の心は，行動を調整することによって，自然に調整される」（ウィリアム・ジェームス，米の心理学者）ということである。これは，心と行の教育を一如のものとしてみた道徳教育であり，平成期の道徳教育論であるともいえるが，この教育論は，昭和期の道徳教育では，タブー視されたが，やっと日の目を見たのである。

よく考えてみれば，形を通して心を育てる教育（形と心とを一如としてとらえた教育）は，日本の伝統的な教育の一つであった。剣道にも茶道にもその教育がみられる。具体的に考えてみよう。

剣道では，「礼によって始まり，礼によって終わる」という。稽古始めの礼は，稽古相手への敬意を表す。相手は人格・考え方・技等において，自分と異なる人間であり，自分にとっては師である。段位が下でも師である。その師に対して宜しくお願いしますという敬意を表す。礼を行うことによって，段位や社会的地位を越えて学びあい教え合うという関係に入るのである。さらに礼によって気位を高めるともいう。自分の人格的価値を高め，学びの心を高めるのである。終わりの礼は，立場や段位を離れて感謝の心を礼に表すと同時に，元の社会的関係に戻るのである。礼によって区切りをつけるのである。

剣道では，このように礼という形を通して，学び合う謙虚な心・敬の心・感謝の心・気位・区切り（節）等の心を養うのである。

茶道も道具の取り合わせや立ち居振る舞い等の様々な型がある。その型をなぞっていく内に和・敬・清・寂や一期一会の心を内面に育てるのである。

学校生活の中にも人間のよさに向かうための型があるはずである。子どもにその型を明示して，子ども一人ひとりがその型の体得に主体的に挑戦する教育（一律ではない教育）の展開が必要ではないか。すでに実践している学校もあるはずである。

このような道徳教育と，それを学習の俎上に乗せて人間のよさを考え深化し統合する道徳の時間とを生かし合った総合単元的な道徳学習は，まさに，この教育思想を受けたものであるといえよう。

川柳を道徳に活かす②

～川柳作りを積み重ねて～

習志野市立谷津南小学校教諭　松田 憲子

川柳は季語もなく17音という短い言葉で表すため，日常はもちろん体験や行事のふり返りでも気軽に取り組むことができる。短い時間で表現できるので，積み重ねることも容易である。

ここではその川柳の特長を生かし，川柳作りを積み重ねて道徳に生かすことを，６年生の１学期最後の道徳授業から提案したい。

積み重ねた川柳でふり返る

１学期間，運動会，宿泊学習など，様々な行事や委員会活動，縦割り清掃などの日常活動にも最高学年として積極的に取り組んできた。その中での思いを，行事ごと，月ごとに川柳で表してきた。その積み重ねをもとに，次のような視点を決めて，あらためて川柳を詠み，１学期をふり返った。

「うれしかったこと」
優勝だ　涙が出てきた　運動会
長縄で　最高記録が　出てくれた
「６年生になったと実感したこと」
縦割りで　リーダーと呼ばれ　あっ６年だ！
最高学年　全ての行事に「最後」がつく
「力を合わせて取り組んだこと」
組体操　皆で支えて　やりきった
協力して　テントをはれた　よかったな
「心に残っていること」
鹿野山（少年自然の家）涙流して　お別れだ

改めて詠んだ川柳は，体験直後の作品と比べて感動は少ない。しかし１学期をふり返って選んだ場面には，共通の思いがたくさん込められていた。

川柳を資料にして道徳を

①川柳で１学期をふり返る

それらの川柳から１人１作品選び，道徳の資料として活用した。

まず川柳を一覧にしたもの（資料）を配り，感想を話し合った。「この川柳でいろんな事が思い出された。」「一日一日がすごく大切に思えた」「みんな６年生になっていろいろな変化があったんだなと思った。」「運動会や陸上大会で努力や達成感をみんな感じていて，やっぱりみんなでがんばってよかったと思った」などの感想があった。

②「友達との絆が深まった」のはなぜか問う

感想を話し合った後，次の川柳を提示した。

５年より　友達との絆が　深まった

「どうして絆が深まったのだろう」と子どもたちに問う。「そりゃあ……」と言いかけたが，なかなか言葉が出ない。「去年はちょっとしたことでもぶつかったけど，今年は次々大変だったから，みんなで協力した」「もう小学校は最後で，このメンバーでできるのも最後だから，ひとつになれたと自分も思う」川柳の作者の思いを聞いていたのが，次第に自分の思いと重なって自分の言葉で語っていた。「６年になって去年よりずっと大変だけど，一人じゃできないこともみんなとだとがんばれた」の意見にみんなが共感した。

話し合いを通して，一人ひとりの視点で表した川柳が，クラスの視点で見直され，５年生からの成長を自分たちも実感し，クラスの仲間に対する協力，感謝，友情などの意識が深まったのである。

③さらに２学期の自分のありかたを考える

最後に２学期はどうしていきたいか考えた。

「１学期にも増してハードになると思うけれども，マラソンや市内ボール大会に向けてみんなと一緒にがんばっていきたい」「一緒にがんばることで，もっと仲良くなりたい」「みんなとの思い出をもっとたくさん作りたい」など，一人ずつ真剣に考え，２学期への意欲を高めることができた。

川柳実践のよさ

今回の道徳授業では川柳を資料として「クラスの絆の深まり」に注目させ，仲間意識を高めることができた。そのプロセスでお互いのがんばりを認め合ったからである。それは自作の川柳を資料化した成果でもある。子どもたちの心がこもった川柳が子どもたちの心を動かす。

人間関係づくりの演習を活かす②

～「ことばのキャッチボール」で温かい人間関係づくりを～

市原市教育センター所長　土田 雄一

コミュニケーション力を育てる

光文書院の副読本には，人間関係づくり関連の演習教材を学年ごとに配当してある。お互いのよさを認め合う演習（２・３・５年）と温かい人間関係を築くコミュニケーション力を育てる演習（１・４・６年）である。96号では『連想イメージゲーム「いいねぇコール」』（５年）の活用方法を紹介したが今回は，「ことばのキャッチボール」（４年）を紹介する。

「ことばのキャッチボール」（ナイスボール）で温かいコミュニケーションの築き方を学ぶ

４年生に掲載されている「ことばのキャッチボール」は，基本的な会話の練習だが，実に重要な道徳的内容が含まれた演習である。

１演習のねらい
相手の気持ちを考えた言葉遣いをしようとする心を育てる。
２活用のしかた
①〈場面①〉の状況を把握し，二人のやりとりについて「デッドボール」（かちんとくる言い方）か「ナイスボール」（ほっとする言い方）か判断する。
②上段（デッドボール）は何がいけないか，下段（ナイスボール）はどこがよかったかを話し合う。「おそかったけど，何かあったの？」「おそくなってごめんね」は相手を思いやった言葉であることを押さえる。

さらに，この会話を基本として次の場面の会話のしかたを考える。

〈場面②〉
両手いっぱいにクラスのゴミ箱をかかえて運んでいたゆきさんは，廊下の掃除をしていたひろきくんのバケツにつまずいてバケツの水をこぼしてしまいました。

この場面で，ゆきさんはなんと言うのか。「こんなところにバケツをおかないでよ！」と言えば，相手のひろきくんも「前をよく見て歩けよ！」と言い返したくなる。

お互いに「自分の感情（怒り）を表現した言葉」である。相手の気持ちや状況を思いやる言葉がない。だから，「デッドボール」になる。やりとりが「ドッチボール」的である。

そこで，「相手を思いやった言葉」を考えさせ，実際にロールプレイをして，活用してみるとよい。

ゆき　：ごめんなさい。前がよく見えなくて……。
ひろき：だいじょうぶだった?ごめんね。バケツをもう少し端においておけばよかったね。
ゆき　：ありがとう。水をふくのを手伝うわ。
ひろき：ありがとう。でもだいじょうぶ。

このような温かい会話がつながり，人間関係を築くことにもつながるだろう。

実際に体験させることで言われた時の気持ちがわかる。思いやる言葉の大切さに気づくだろう。

道徳に役立てる

相手のひろきくんも思いやる言葉を使う演習であるから，４年11「またきてね」と関連させて活用する方法もある。資料はお年寄りへの思いやりの内容であるが，お年寄りへの言葉かけについても「相手の立場を思いやって」考えることができればよいだろう。

そのためにも「なんと言うか」にとどまらず，「なぜ，そのような言い方をするのか」とつっこんだ話しあいをさせるとよい。「相手の気持ちを考えた言い方」をすることの大切さを押さえたい。

思いやりのある温かい言葉は，温かい人間関係を築くことにつながる。

4コマ漫画で価値を構造的に分析

1．正直に言おう。

正直に言うことはよいことである。これが学校で教える道徳教育の一般的なスタンスである。これは間違っていない。しかし，正しくもない。

うそをついてはいけない，ごまかしてはいけない，そのような流れの中で，正直はよいことであるという「結論」が導き出され，価値となり，道徳的学習内容として授業に位置づけられることとなる。その結果，その結論までの過程がすぽんと抜け落ちたまま，あたかも「正直に言おう」という結論に到達することがねらいのごとく設定され，授業が行われる。

ところが，そのような結論は，実生活からみれば一般的ではない。なぜなら，この世の中，何でもかんでも正直に言えばうまくいくわけではないからである。時には上手にうそをつくことが必要な場合だってある。道徳教育の一般通念と，社会の中の一般通念が異なっているのである。そこから，前者を建て前，後者を本音と呼ぶようになり，めでたく本音を隠してきれい事を言い合う，表面をなぞって終わる道徳授業のできあがりである。

これでは困る。どうしたらよいか。「正直に言う」ことのよさにたどり着くまでの過程を子どもたちと共有することが大切である。「ああ，正直にというけれど，何でもかんでも思ったことを言えばいいというわけではないのだな」「正直になると，こんなにいい気持ちになるのだな」と。

この漫画を通して，始めに結論ありきではなく，なぜそのような価値観が人間社会において結論となり得ているのかを考える。その結果として道徳的実践力が育まれていくことを期待している。

道徳授業の工夫

筑波大学附属小学校教諭　加藤 宣行

2．無駄な努力

前作の漫画から続いている形をとっているが，内容的には全く別の視点から切り込んでいる。ここでの主題は「頑張りどころを見つけよう」ということである。

主人公のA君は，宿題を忘れたことを正直に先生に言ったのはいいのだが，その理由を取り繕うために，様々な「いらぬ努力」をする羽目になる。

では，同じ努力でも何が「いらない」もので何が「いる」のであろうか。これを明らかにすることが，この漫画資料を使って授業をする目的である。というのも，一般的に「勤勉・努力」の授業は，努力をしてすばらしい結果を導いた人物や話を取り上げ，「頑張ると立派な成果を残すことができます。みなさんも頑張りましょう」というように，表面的な結果のみをとらえて，何でもかんでも頑張ればよいというような，漠然としたイメージを与えて終わってしまうことが多いからである。

そうではなく，「ただやみくもに努力すればよいということではない」「努力の方向が大事である」「そのような方向を持つ際に大切な心は何か」「そのような方向性を持った努力をするよさは何か」などを，子どもたちとの話し合いを通して考え，見つけていく。

この漫画からは，「後悔先に立たず」という格言や，うそがうそを呼ぶという「うその連鎖」のようなお説教じみた展開も考えられなくはないが，ここではやはり，「努力の方向性・可能性」という，価値について前向きに分析していく展開にしたい。

教師たるもの，授業が「無駄な努力」とならないように，しっかりとねらい（方向性）をもった展開を心がけたいものである。